

■研究・実践の課題（テーマ）

共食・孤食の食生態に関する国際比較研究：愛知県内児童・生徒における食事のあいさつ行動の形成と共食との関連

■主任研究者 足立己幸

■共同研究者 安達内美子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】本研究はオーストラリア、アメリカ、英国等で実施してきた「小学生についての共食の食生態に関する国際比較調査」（主任研究者足立己幸）（Kumi Eto, Miyuki Adachi, et al. Variables of the Theory of Planned Behavior Are Associated with Family Meal Frequency among Adolescents. *J Nutr. Educ.* 2011,43:525-530. イギリス調査は本学研究倫理委員会の承認 10 号を得て実施している）の一環である。課題提起の出発であった日本での調査を行い、国際比較に供することを目的としてきた。

2012 年 10 月、日進市 H 中学校 2 年生とその学区内小学校 5 年生に対し、自記式質問紙調査（以下、2012 年調査）を行い、解析を行った。その結果、食事のあいさつ行動は、共食、自発的コミュニケーション、食事の楽しさだけでなく、健康にもつながっていた。そこで、食事のあいさつ行動の形成とその重要性、並びに共に食事をする（狭義の共食＝共「食事」）だけでなく、食行動を誰かと共有する（共「食行動」）ことや、「食」を共有する（共「食」）こととの関連について明らかにすることを目的とし研究をすすめてきた。

今年度は、家庭での“食事の楽しさ”とその要因について、小学 5 年生と中学 2 年生における縦断的検討を行い、“食事の楽しさ”と主観的健康状態、共「食行動」（共食、食事のあいさつ、食事中の発話等）、食事環境との関連について、小学校 5 年生と中学校 2 年生の同異点を明らかにすることを目的とした。

【方法】“食事の楽しさ”とその要因について、日進市 H 中学校区内小学校 5 年生（2012 年調査）及び H 中学校 2 年生（2012 年調査時小学校 5 年生）における断縦的検討を行う（縦断研究）。

調査：2015 年 11 月、日進市 H 中学校 2 年生全員に対し、集合法による自記式質問調査（以下、2015 年調査）を行った。在籍数 230 名の内、調査日欠席者を除く、223 名（男子 109 名、女子 114 名）の協力を得た。

調査項目（2012 年調査と同じ）：基本属性（性別、小学校名）、食事関連 QOL（朝・夕食の楽しさ）、主観的健康状態（主観的健康感、不定愁訴）、食行動等〔（朝・夕食ごとの食前の空腹感、摂食頻度、食事のあいさつ、共食者、一番楽しい共食相手）、食事中の発話、食事づくりの手伝い〕、食事環境（食事中の会話、テレビの視聴、食卓に携帯電話）

解析：2012 年調査において、協力が得られた 252 名のうち、朝・夕食の楽しさについての質問に対し、回答が得られた 250 名（男子 124 名、女子 126 名）と、2015 年調査において、協力が得られた 223 名のうち、A 小学校、N 小学校、E 小学校出身者で、朝・夕食の楽しさについての質問に対し、回答が得られた 200 名（男子 100 名、女子 100 名）について、男女別に解析を行った。

①2012 年調査：小学校 5 年生と 2015 年調査：中学校 2 年生の食事関連 QOL、主観的健康状態、食行

動等。食事環境について比較を行った。

②朝食が楽しかった群、夕食が楽しかった群の主観的健康状態、食行動等、食事環境について小学校5年生と中学校2年生の比較を行った。

欠損値は項目ごとに除外した。群間差の検定は、Fisherの正確確率検定を用い、統計解析パッケージIBM SPSS Statistics23（日本アイ・ビー・エム株式会社）を使用し、有意水準は5%（両側検定）とした。

【結果】

①調査日の“朝食の楽しさ”について

朝食について、男子では「楽しかった」、「まあ楽しかった」と回答した者が、小学校5年生時65.0%、中学校2年生時68.5%とわずかに増加した。女子では小学5年生時82.5%、中学2年生時74.0%と減少した。

②調査前日の“夕食の楽しさ”について

夕食について、男子では「楽しかった」、「まあ楽しかった」と回答した者が、小学生時86.3%、中学生時87.0%だった。女子では小学生時94.4%、中学生時94.0%と、男女共に高い割合を維持していた。

③小学校5年生と中学校2年生の主観的健康状態、食行動等、食事環境の比較

小学生時に比べ、中学生時において男子は、朝食の共食、食事づくりの手伝いをする者の割合が有意に減少していた。また、食卓に携帯電話がない者の割合が有意に増加していた。女子は不定愁訴が4項目未満の者の割合が有意に増加し、夕食時のあいさつ、食事づくりの手伝いをする者の割合が有意に減少していた。

さらに、男子では主観的健康状態および食行動等に関する質問項目17項目の内、9項目で良好を示す回答の割合が増加していた。女子では7項目だった。男女ともに良好を示す回答の割合が増えた項目は、主観的健康感（健康）、不定愁訴（4項目未満）、朝食の欠食（なし）、夕食の欠食（なし）、食卓に携帯電話（ない）だった。

④“朝食の楽しさ”の要因の比較

朝食が楽しかった男子は、食事前の空腹感がある、食事づくりの手伝いをする者の割合が、小学生時に比べ中学生では、有意に減少していた。女子も食事づくりの手伝いをする者の割合が、小学生時に比べ中学生では、有意に減少していた。男女共に、朝食時にあいさつする者、共食した者の割合が、有意差は認められないものの中学生では減少していた。

⑤“夕食の楽しさ”の要因の比較

夕食が楽しかった男子は、食事づくりの手伝いをする者の割合が、小学生時に比べ中学生では、有意に減少していたが、食卓に携帯電話がない者の割合は増加していた。女子も食事づくりの手伝いをする者の割合が、小学生時に比べ中学生では、有意に減少していた。男子は、食事中の発話がある者の割合が、有意差は認められないものの中学生では減少していた。食事のあいさつをする者について、有意差は認められないものの中学生について、男子では増加し、女子では減少していた。

【まとめ】朝食の楽しさについて、小学生時に比べ中学生では、男女共に共食と食事のあいさつの影響が弱くなることが考えられた。夕食の楽しさについて、男子は小学生に比べ中学生では、発話の影響が弱くなり、食事のあいさつが強くなることが考えられ、女子は食事のあいさつの影響が弱くなることが考えられた。